

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

河野保博

【所属】(助成決定時)

京都造形芸術大学

【研究題目】

中国唐代交通路の復原研究—東アジアの交流解明の基礎として—

【研究の目的】(400字程度)

近年、古代東アジア交流の研究は盛んにおこなわれ、古代の日本列島と中国大陸・朝鮮半島地域との多彩な交流についての研究は年々深化している。しかしながら、この交流史においてはモノや情報の伝播など事象面のみが中心に取り扱われ、それらを運ぶ人、そして彼らが歩く交通路についての具体的な検証は少ないと言わざるを得ない。交流の実態は具体的な「人・モノ・情報」の動きから検証されなければならない。そして、モノや情報を運ぶ人の動きこそ、交流の本質であり、彼らの歩いた交通路を復原することで交流の実態に迫ることが可能になる。

長安・洛陽という隋唐時代の都—古代東アジアの中心から朝鮮半島や日本列島、さらには南方地域までモノや情報、制度、思想、技術などが伝播し、各地で受容されていった。しかし、中国大陸の中心から、どのように各地に運ばれていったのか、中心地と沿岸部を結ぶ経路は明確ではない。発信地と受信地を結ぶ交通路の研究は極めて重要である。そのため、本研究では唐代交通路を具体的に復原し、モノや情報を伝えた人の交通・経路を解明することを目指した。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は古代東アジアの交流の実態解明を主眼としており、唐代交通路の復原地域も周辺地域との交流関係史料の多い隋唐時代の都である長安・洛陽を中心とする中原地域と、沿岸部から内陸部へ向かう運河を中心とした江南地域を調査地域とした。

まず、調査地域の地誌や地方志などから地理情報を集め、同時に当該地域の地図・地形図を収集した。現代中国の地形図は一般の閲覧に供されておらず、交通路の復原に必要な正確な距離や地形を分析することができない。そこで唐代交通路の正確な復原を行うために、近年研究の進む「外邦図」と呼ばれる旧日本陸軍参謀本部作成の地図や旧ソビエト参謀本部・アメリカ陸軍地図局などによって作成された地図・地形図を収集・分析することにした。さらに、アメリカによって撮影された衛星写真を用いることで自然地形や城郭都市などを確認し、また、現地調査で得られた地理情報などを組み込み、GISを用いた解析も一部取り入れた。その上で、現地において交通路の想定される地域での聞き取りや遺構調査により、自動車を前提とする交通路整備以前の具体的な交通路の様相を検討した。以上のような作業・現地調査を実施し、得られた地域の歴史的経緯・景観・地理情報を活用することで、多層かつ立体的な交通路の復原を目指した。

中原地域の調査では、主に太原から長安へ向かう道、長安から洛陽へ向かう道を調査し、平安時代の入唐日本僧円仁の記録である『入唐求法巡礼行記』や唐代の史書の記載に見られる交通路を検討し、上記のような作業、現地での聞き取りによって自動車登場以前の交通路の痕跡を詳細に踏査することができた。

江南地域の調査では、隋代に開鑿され唐代にも運河として利用されていた揚州と杭州を結ぶ江南河流域を調査した。現在も京杭運河の一部として残っており、並行する交通路に点在する寺院や遺跡などを手掛かりに沿岸部と内陸部を結ぶ唐代の交通路を検討することができた。

【結論・考察】（４００字程度）

今次の調査では中原地域と運河流域の交通路の一部であったが、唐代の交通路に遡り得る痕跡を発見することができた。さらに上海近郊の唐宋代の港湾遺跡も実見することができ（詳細は後日公表する予定）、唐代の人々あるいは周辺領域の人々が歩いた交通路の復原を前進させるものとなった。

唐代の同時代史料だけで検討するには限界があるが、人馬による交通を前提とした交通事象は前近代において大きく変化することはなく、自動車前提の交通路以前の状況を手掛かりとし、前近代の地誌・地方志や近現代の多様な地図を用い、衛星写真などを組み合わせて複合的に検証することで、変化の著しい近代から現代にかけての地名や地形の変化に対応しながら、現代の地図に唐代の交通路を段階的に復原すること、その上で「人・モノ・情報」の具体的な移動を考察する研究手法が有効であることが確認できた。

今後は同様の手法を用いて唐代の交通路を復原していくと共に、運河と陸上交通の関係、水上交通の様相などについても検討を進めていきたい。